

2023年度第2回安全保障研究部会兼IT・AI・情報学研究部会研究会実施報告

1 実施日

2023年11月4日(土) 13:00~17:00(勉強会)
17:00~18:30(懇親会・フリーディスカッション)

2 場所

東京都中野区立地域活動センター会議室 B

3 参加者

乾一字学会顧問、安保研・AI 研部会長、幹事以下8名

4 勉強会の概要

(1) セッション 1 (安全保障研究部会)

泉谷清高安保研幹事より、「ロシア・ウクライナ戦争のコスト」について、日本国際問題研究所論文集に投稿されている岡田美保氏の同題名の論考を題材として、それをどう評価するかという観点で発表があった。

発表の概要は以下のとおり。

・はじめに

ウクライナ侵攻後に課された制裁は、クリミア併合(2014年)時よりもはるかに強力でロシアの国家財政に大きな打撃を与えている。

・開戦前後までのロシア財政

ロシアが戦争を継続できている要因の一つに財政の健全性がある。ただし、赤字財政に陥っていることは間違いなくそれを「国民福祉基金(原油価格の上昇が年度見積もりより高くなった際に自動的に積み立てられる基金)」で補っている。それにより今後2年は戦争継続が可能との見方もある。

・2023-2025年予算及び予算計画法案

歳出のピークを2023年に設定。そこで高止まりと想定。これは、現政権が戦争のピークを2023年~2024年に想定していることを示す。その後は大統領選を経て、安定政権になることを考えており、そこで国家総動員などが可能とみている可能性も。

歳入は、向こう3年間の財政赤字を増税と内債で補填することを考えている可能性。

・おわりに

ロシアの財政問題を外観したが、3つの結論が導き出せる。

第1は、経済制裁による歳入減少と戦争による歳出の増加がありロシア財政は大きな打撃を受けた。それを国民福祉基金で補っている。

第2は、連邦予算では2023年に国防費は高止まりすることを想定している。

第3は、石油・ガスへの依存度が今まで以上に高まり財政の柔軟性はさらに失われる。内債にも手を出さざるを得ず、国民生活にも影響する可能性も。それが戦争継続へ影響する可能性も。

発表後、ロシアが戦争継続できている要因には中国の下支え要因や中東情勢により押さえようとしていた原油価格も高騰する可能性など、ロシアの国内要因以外も考慮していかなければならないなどの論点を中心にディスカッションが行われた。

(2) セッション2 (IT・AI・情報学研究部会)

村上恒夫 AI 研幹事 (学会理事) より、前回の発表「生成 AI の利用について－ChatGPT の利用とこれからの課題」に引き続き、「生成 AI と共に生きる社会－AI と生きるということはどういうことか」との題材で発表が行われた。前回同様、本発表資料は生成 AI (OpenAI の ChatGPT、Google 社の Bard) を中心に作成したことが事前に指摘された。

発表の概要は以下のとおり。

・IT 社会の進化

AI、ビッグデータ解析に代表される IT の発達は目を見張るものがあり、これらの技術は従来の生活様式を変革させている。

・生成 AI とは

生成 AI は AI の一形態であり、主にデータやコンテンツの生成に特化した技術やモデルを指す。その中には、自然言語生成、画像生成、音声生成、音楽生成などがある。生成 AI には、大規模なニューラルネットワークモデルを使用して、データを生成または変換する能力がある。

・生成 AI が人間の仕事を奪うかを生成 AI に聞く

ChatGPT と Bard に同質問を投げかけたところ、ほぼ同様な内容の回答が返ってきた。ただし、回答の取りまとめ方をみると、ChatGPT のほうが洗練されている印象だ。その内容は、①自動化と変化：AI は予測可能なタスクを自動化するのに適しており、そのような職は AI に奪われる可能性はあるが、創造的なタスク、人間らしいスキルが必要な仕事はなくなる。②新たな職種の出現：AI の開発、メンテナンス、倫理的な監視、データ解釈など、AI を活用する新たな職が出現するだろう。③人間らしいスキルの重要性：感情の理解、倫理的判断、創造性など人間の強みであるスキルは重要で、AI はその補完に留まる。

この発表に対し、AI を巡る国際枠組みの欠如、自律型致死兵器（L A W S）の問題、各国の AI に対するスタンスなどに関しディスカッションが行われた。今後は、「AI に使われる」、「AI を脅威視する」というよりは、その有用性を最大限に活用するとともに、AI をコントロールすることが最重要であるとの意見がみられた。

（3）セッション3（ウクライナ戦争の情勢分析）

乾一字学会顧問より「ロシア・ウクライナ戦争の情勢分析」に関して、分析手法などにおいてはどういうようなことが重要なのかについて、講話が行われた。

内容は以下のとおり。

・はじめに

本講話の狙いは、ウクライナ情勢を自分の力で見るときの材料提供。

・ウクライナ情勢に登場する日本の政治家、言論人などの区分け

①偽情報型、②ロシア視点型、③偽情報型の変種、④人情型

・ロシア・ウクライナ両国の比較

人口、経済、軍事力どれをとってもウクライナは圧倒的に劣る。ウクライナの強みは第1に侵略への強い抵抗意志、第2にウクライナ政治指導層の若さが挙げられる。

・和平の困難さ

一常に考慮しなくてはならないのが、ロシアの核使用および第3次世界大戦への拡大抑止。これが、これまで米欧がウクライナ支援に制限をかけてきた最大の要因

一両国とも一歩も引かない姿勢

一ウクライナ支援国の変化：支援疲れの顕在化

一ロシアの状況：経済の低迷、国際刑事裁判所によるプーチン大統領に対する逮捕状、中国の属国化

一パレスチナ紛争の影響：米国の二正面作戦化、武器・弾薬支援の増大

本講話に対し、参加者からの質疑、およびその説明・解説がなされた

（4）その他

さらに、今回のセッションでのテーマとは別に、参加会員が現状進めている調査・研究活動及び現在視点に持っている事項についての中間報告を実施した。

以後の両研究部会の行事予定は、様々な情勢に鑑み、以下のとおり変更いたしたい。
3月学会主催「第8回安全保障セミナー」（当初予定では2月予定）兼 AI 部会主催「第1回

AI セミナー」(当初予定では9月予定であったが実施できなかった)
4 / 四半期に、両部会の第3回研究会を企画

(部会長佐々木記)

研究会の様子 1



研究会の様子 2

